

「吟詠（詩吟）」

一般社団法人総合防犯士会 会長 成田 純一



平成14年（2002年）から始めて22年経ちました。今年65歳になりましたが、吟詠の集まりでは、まだ「小僧っ子」です。70代、80代の先輩が元気よく張り切っています。

「吟詠」になじみのない方が多いと思いますので、簡単に説明します。

吟詠（ぎんえい）は、詩吟（しぎん）とも呼ばれ、詩に節調をつけて歌う芸道です。吟詠は、漢詩や和歌を中心に、俳句・新体詩・現代詩など、さまざまな詩に節をつけて歌う邦楽のひとつです。

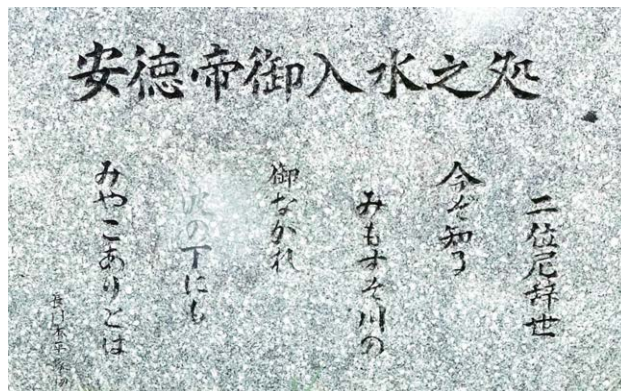
詩の内容をとらえ、声で心情や情景を表現しようと心の底から吟じあげます。「作者の気持ち」をいかに表現できるかで吟詠家の力量の高さが判ると言われています。

私の経験談ですが、良寛作の「半夜」に接した時、良寛が過ごした「五合庵の夜」を体感しようと、6月の夜、梅雨の中を松姫峠まで車を走らせ、杉林の中で雨の音を聞いて深夜まで過ごしたことがありました。



また、最近では村上仏山作の「壇の浦を過ぐ」という詩の最後の「御裳川（みもすそがわ）」についてイメージできず、悩んだ挙句に昨年の10月、赤間神宮、壇之浦、みもすそ川公園などを訪ねてみました。

関門海峡の潮の流れを見て、流れる水の量、その規模の大きさに鳥肌が立ちました。しかも6時間ごとに流れの向きが反転する…？驚きです！



この流れの中に孫の安徳天皇を抱いて入水したとされる二位の尼(平時子・平清盛の正室)の辞世が刻まれています。「今ぞ知る みもすそ川の 御ながれ 波の下にも みやこありとは」…、「ん〜っ! 村上仏山が感じた御裳川をどう吟じたら良いのか?」まだまだ悩みは続きそうです。

吟詠の楽しみ方は、ただ単に先人の作った詩を素読して吟じるだけでなく、実際に旅行して作者が見た景色を見聞する楽しみもあります。

現地で、作者と同じ景色を見て、空気を感じることで作者の気持ちに寄り添った気にもなり、感動もあり、楽しく過ごせます。新型コロナ流行の前には「吟行会」として、各流派や団体で史跡を旅する企画を盛んに行っていました。そろそろ復活しそうです。

さて、ほとんどの吟詠の流派・団体で行われると思いますが、半年か1年に1回「温習会」と呼ばれる発表会があります。

温習会は「おさらい」ともいい、舞踊、音曲などを稽古している人々が習得した技芸を発表する会を言うそうです。

普段稽古で指導してもらっている師範の先生のほかに「流派の宗家」も見ている中で吟じ、どれだけ成長したかを見てもらう行事です。趣味とはいえ、仕事のプレッシャーとは違った緊張感があります。その他、いろいろな団体が主催する「コンクール」があり、なるべく毎年続けて参加するようにしています。



吟詠は、一人で吟じる「独吟」や、何名かで吟じる「合吟・連吟」の他、剣舞・詩舞と一緒に吟じる「伴吟」があります。



テーマを決めて吟詠、剣舞、詩舞、朗読などを組み合わせてストーリーにして「構成吟」という形に仕上げた「発表会」も多く企画されています。

1時間から2時間程度の企画が多く、退屈せずに物語に引き込まれて楽しめます。ご自身で吟じなくても「先人の作った詩」に接してみてもは如何でしょうか?